

五 民俗芸能の保存、継承活動

(一) 天王ばやし保存会

昭和五十六年、筆者は福生珠算学校の月報七月号「福生青年団あれこれ」の中に天王ばやしについて次の様に書いた。

「福生のまつりの笛は一説には京都から流れてきたものであるという。本三の川辺俊一氏はこの笛に限りない愛着を持ち、本譜にしたりテープに入れたりして、色々調べておられた。彼はこの笛の調べは戦に敗れた武将の奏でるような哀れさを感じるといふ。」
この月報の記事が契機になって昭和五十七年四月二十九日、次の有志が珠算学校に集った。

島海正吉 清水浅雄 野崎笹男 窪田成司 田村良雄

川辺俊一 清水喜一 武内幸三 山崎茂男 橋本孝蔵

天野幸次（市郷土資料室） 以上十一名

この結果保存会結成について意見が一致し、その後二度の会合を持ち次の様な趣旨書を作成し有志に呼びかけた。

福生まつり太鼓保存会設立について

古くから福生に伝わる夏祭りの笛と太鼓の調べは、非常に格調高い由緒あるもので、その哀調切々とした響きは人々の心の奥底に今でもしみわたっております。しかし近年では祭り囃子の華やかなりズムにおされ、次第に消え去ろうとしております。この由緒ある笛と太鼓を奏でることの出来る人はすでに年輩の方々のみ

となり。今保存しなければやがて消滅してしまいます……。

かくして昭和五十七年七月十九日、名称も「福生まつり太鼓保存会」として発足した。

会長 橋本孝蔵

副会長 川辺俊一 田村良雄

書記 竹内幸三

会計 大野貞一

会員 二十一名

以上の事項を決め直ちに活動に入る。皆同好の志の集まりである。五月の準備会がすぎるとすぐに六つ穴の笛を探し始めた。幸い「かたばみ楽器店」の志村秀雄氏がこの笛の名人であった関係上、この六つ穴の柴水笛を手配して貰った。一方本町の川辺、武内氏等は当時才一小学校の教諭であった千馬正代氏（音楽専科）に依頼し、この調べを楽譜にして児童にリコーダーで演奏してもらった。そして七月二十九日、祭礼の当日、神明社境内に各町の御輿が集合したなかで、会員と児童が天王ばやしの合同演奏をおこなった。その後九月十九日の神明社の例祭、十一月三日の市民文化祭開会式にも合同演奏をおこなった。

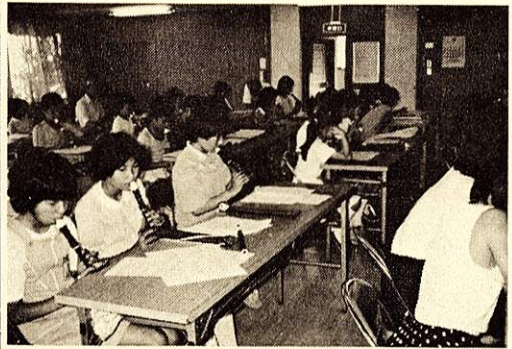
この保存会の活動は音律の保存・継承の外に、この囃子の源を追究し、この地でどのように囃され、どのような意味を持っているものなのかという研究もおこなっている。その中で会の名称について再検討することとなり、昭和五十八年五月に「福生天王ばやし保存会」と改称した。

現在会員は三十五名であるが、笛を吹ける者は僅か十三名で、いずれもかつて子供の頃に笛を吹いたことのある年輩者ばかりである。そのため後継者育成の面から、千馬正代氏（現福生六小教諭）を講師に月二回の講習会を開講している。これには四十二名の児童が参加し、本格的な横笛での練習に励んでいる。

昭和五十九年七月、それまで各地区で多少の違いをみせていた笛と太鼓の音律を長沢地区のものに統一することとした。加美、本町共に殆んど長沢と同じであること、最初のオ一音が最も高くピーピーと出、技術的には修練が必要だがそれだけに格調の高さがあることなどがその理由である。



▲昭和59年「ふるさと祭り」(立川市)に出演



▲講習会



◀神明社祭礼

(二) 福生市はやし連合会

現在、福生市には十団体の祭り囃子継承団体があり、それぞれ町会単位で構成され諸々の活動をおこなっている。これらの団体は、祭り囃子の普及と発展及び団体相互の交流を深めるため「福生はやし連合会」を結成している。

同連合会の概要は次のとおりである。

名称 福生市はやし連合会

設立 昭和49年4月1日

目的 郷土芸能主に祭り囃子の普及と発展、会員相互の親睦。

組織 各町会のはやし連に加入している者で組織。

昭和五十九年度の構成

会長 石川幹雄(志茂)

副会長 清水信作(牛浜)

〃 古谷修一(長沢)

幹事 井上賢司(加美)

加盟団体及び会員数(子供は除く)

加美町はやし連	会員 24名	会長 井上賢司
奈賀町はやし連	会員 28名	代表 田村良雄
永田町はやし連	会員 24名	会長 笹本征司
志茂町はやし連	会員 21名	会長 清水英夫
志茂二はやし連	会員 25名	会長 田村定夫
牛濱はやし連	会員 24名	会長 清水信作

牛二はやし連	会員 22名	会長 松本幸一
原ヶ谷戸はやし連	会員 9名	会長 笹本国雄
本七はやし連	会員 8名	会長 古屋雅男
鍋一はやし連	会員 19名	会長 森田隆夫